

新刊
紹介

アン・ダルトロップ著
金丸輝男監訳

『ヨーロッパ共同体の政治』

(有斐閣) 二五二頁 一、八〇〇円(B六版)

ヨーロッパ共同体について書かれたものは、入門書の大いから學術論文にいたるまでを考慮に入れるとすれば大変な量にのぼっている。わが国のヨーロッパ共同体研究は、近年にいたり質・量とも非常に厚みをましたようである。

しかし、この分野での文献においては経済分析に関するものが比較的多く、人々はこれまでも必ずしもバランスのとれた関心をもってはいなかった。社会や法や政治につ

For some in ancient books delight;
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth
Not to be thought expert in both.

いてはいささかこれを等閑に付してきたきらいがないでもなかったのだ。しかしもとより、最近のヨーロッパ共同体は、単なる経済の枠をこえて発展しつつある。われわれは今日、決して従来のそれにとどまることのない多様な視点をもってその動きをみるようにせまられているのである。

本書は、こうした意味においてきわめて時宜をえたものである。もともと本書は入門的なものを狙って書かれたものであるとはいえ、その意図するところはヨーロッパ共同体がすでに超国家的な、一つの巨大な社会的・政治的構造物となっている様子を描こうとする点にあるからである。共同体加盟国の社会や政治は、いうまでもなく過去数十年それぞれ何らかの形で大きな変容をとげた。伝統的な「国家」をこえた共同体という枠組みのなかで、たとえばその質金体系も雇用政策も、労働組合も圧力団体も、また司法的権限も選挙制度も、政党活動も議会のありかたもすべて変質させたのである。本書を一読する読者は、おそらくヨーロッパ共同体がたどってきたそうした変容の足跡を的確に知ることができ、なお

かつ一九八〇年代において、共同体が直面している社会的・政治的課題の大きさと重さを理解することができにちがいないのである。

なお著者はイギリス人であり、本書のいたるところでとくにイギリスとヨーロッパ共同体の関係をとりあげて分析している。イギリスは最初、共同体の妨害者としてたちはだかりながら、しかし結局、ヨーロッパの一員とならざるをえなくなる。そうした様相がビビッドに描かれているのである。この点もまた読者の興味をそそることになるう。

訳文は全体としてこなれていて読みやすい。巻末には読者の便宜をはかり参考文献と年表が付されていて親切である。ヨーロッパ共同体の社会や政治に関心をもつものにとって、ぜひ一読してみたい本である。

梅津 實 (大学法学部教授)

安永武人著

『戦時下の作家と作品』

(未来社) 三四五頁 二、五〇〇円(B六版)

十五年戦争が終結してほぼ四十年たっ

た。最近になってようやく戦時下の文学のありかたを明らかにしようとする機運が生れつつある。安永武人教授の著書『戦時下の作家と作品』（未來社 一九八四年十二月二十三日）は、その機運のなかで重要なものの一つになるだろう。本書に収められた火野葦平『麦と兵隊』についての論文が、『戦時下の文学へその一』として発表されたのは『同志社国文学』の創刊号（一九六六年三月）であつた。以後、『同志社国文学』は教授の『戦時下の文学』を掲載していくことになるが、それが昨冬一本にまとめられたのである。あらためて読み返していると、当時のことが彷彿として思ひ出されてくる。

この間に、十五年戦争の体験は、いっそう風化してしまったが、教授の姿勢は一貫して変っていない。そのために時として教授が孤絶しているように私には映るのである。しかしそれは状況への教授の抵抗の姿である。教授は本書のモチーフについて、『同胞の屍が』つぎつぎに戦場を埋めてゆく、他民族が日本軍隊の侵略によっておびただしい血をながしていた、その悲惨な年月の

あいだ、同時代の日本の文学は、どのようなありようをしていたのか——この一念がこれらの諸論を執筆させた」と「あとがき」で書いている。

対象となつた作家と作品は、火野葦平『麦と兵隊』、石川達三『生きてゐる兵隊』、林房雄『青年』、島木健作『生活の探求』、和田伝『大日向村』、横光利一『旅愁』、伊東静雄『春のいそぎ』、『植民地文学——『皇民化』とたたかう朝鮮の作家たち——』である。本書で対象とされた作家と作品のいくつかは、これまでも評論家や研究者によって論じられてはきた。しかし石川の作品と朝鮮の作家たちを除けば、戦時中に「わたし自身が興味をもつて接した作家と作品である。だから、この作業は、かつてのわたしのよみのあさを批判する結果にもなっている」と教授がいうとき、本書の特色があざやかに示されているといつていいだろう。「文学によって創造すべき人間像と、現実にかれらが発見したあたらしい人間とのとりちがえがあつた」（三十一頁）戦争文学の創作における方法上の誤まりについての指摘は、同時に「かつてのわたし

のよみのあさ」への痛切な批判にもなっているのではないか。それは苦渋をともしう作業であつたと思う。本書の行間からにじみでてくるものは、戦争体験の反芻を通して、文学の創造とは何か、という問いかけであろう。それがまた教授の非戦と平和への厳しい姿勢として読者に訴えてくるのである。

本書は學術の書であると同時に警世の書でもある。

玉井敬之（大学文学部教授）

小林章夫著

『コーヒー・ハウス 都市の生

活史—十八世紀ロンドン—』

（慶々堂出版 A五版
二二〇頁 一、七〇〇円）

ヨーロッパ文化と生活史関連の出版がブームを呈しているが、小林氏の『コーヒー・ハウス』は本年五月に発刊され、一ヶ月後に早くも再版を見た事は真に喜ばしい。コーヒー・ハウス隆盛の歴史はロマンに満ちた命題で、新進気鋭の英文学者の筆になる事は称讃に値する。

本書は三章から構成され、一章では英国

へのコーヒー伝播とその効用、次いでコーヒー・ハウスの形成と実態が年代的に詳述されている。二章はコーヒー・ハウスの位置づけ、特に政治家やジャーナリストと個々のコーヒー・ハウスの関係に焦点が当てられている。三章に於いてコーヒー・ハウスに出入りする文人達が系統的に述べられ、十七、十八世紀のコーヒー・ハウスの様々な役割りが紹介されている。

落着いた装丁の本書の第一の特色は、下段四分の一頁は全て本文の注および参考資料に充てられている事であり、挿入画も適切で効果的である。平易な、しかし筆者の年代には珍らしい確かな表現と相俟って実に読み易い。読者はコーヒー・ハウスの歴史を通じて、十七、十八世紀の英国の時代背景を知り得、英文学とコーヒー・ハウスの因果関係に興味が引かれるであろう。唯、銘柄にうるさいコーヒー飲みの常識の種本としての期待は叶え難いのではないか。

それは本編が十八世紀英文学をコーヒー・ハウスと言う「人間のへるつば」を通して示唆しようとする著者の意図で編されているからである。本編後半部で、筆者

は文学に偏りがちな筆勢を、コーヒー・ハウスとの接点に押し戻そうと試みているが、本書の課題を論求すればする程、文学や政治と切り離せなくなるのも、コーヒー・ハウスの歴史的存在がゆえであろう。

当時の英国のコーヒー・ハウスは文化を育み、恋人の待ち合せ場所と成り下った街の喫茶店の類ではない。読者の誤解を解き、当時の英国人の暮し振りを門外漢に説く事も本書の意図かも知れないが、軽く読み流し出来ない箇所には本書の真髓が隠されていると言えよう。十八世紀英文学の面白さは、案外、コーヒー・ハウスの世界に在る様に思われるのも、小林氏の巧みな論旨の展開に負っている。また前世紀および今世紀に於けるコーヒー・ハウスのその後は、著者の残された課題として大いに期待されている。

能口盾彦（工学工学部助教授）

杉井六郎著

『明治期キリスト教の研究』

（同朋舎出版） A五版
五〇四頁 九、〇〇〇円

本書は多年にわたる杉井教授の諸論考を今回筆を加えて集録したものであって、そ

れは明治期キリスト教の総論ではなく各論とも言つべきものであるが、その各論述は歴史学者の心情と綿密さを以て書き上げられたものである。総論的叙述は管見に入っただけでも、O. Cary (1909, 1976), R. H. Drummond (1971), 山本秀雄（一九二九、昭四）、比屋根安定（一九三八―四〇、昭一三一―一五）、石原謙一（一九七二、昭四二）、熊野義孝（一九六八、昭四三）、海老沢大内（一九七〇、昭四五）、土肥昭夫（一九八〇、昭五五）等があり、それらと比較対照すれば、本書の特色となっている点も明かになることと思われる。

また本書の取扱うキリスト教はプロテスタント教会に限られており、前記のケーリーの著は、カトリック教会やハリストス正教会の歴史をも取扱っているが、ここではそうではない。ただし帝政ロシアの時代に（明治十九年から二五年まで）レニングラードやモスクワで学んだ小西増太郎の「覚書」の論考においては、ハリストス正教会関係の事項を、主として「正教新報」によって報告されている。

本書の内容は第一章、横井左平太と横井

大平のアメリカ留学、第二章、宣教師の明治維新（フルベッキの活動）、第三章、譯者の見た初期教会形成過程（横浜の場合）、第四章、「公会名簿」に見える鈴木貫一について（米国に留学し、後在フランス臨時代理公使となる）、第五章、明治のキリスト者群像（金森通倫を中心として）、第六章、明治思想史における自由キリスト教提唱の意味、第七章、小西増太郎覚書、第八章、反戦思想とトルストイヤン、となっている。終章は「明治期キリスト教の決算」と題されており、これが全体の総括となっており、著者独自の見解が述べられていて興味深い。各章の記述は多くの資料に裏付けられ、独断的な事実認定や価値判断を避けている。同志社人としては、熊本洋学校設立を提唱した横井小楠の甥の太平（だいへい）とその兄の左平太の米国留学の詳細や、新島先生の後継者として我も人も認めていた金森通倫のことなど、新しい資料も加えられて教えられる所が多い。フルベッキについての記述なども当時の留學生の生活などを鮮やかに示している。

高橋虔（大学神学部名誉教授）

田中嗣人著

『聖德太子信仰の成立』

（吉川弘文館 B六版
二八八頁 二二、五〇〇円）

日本の歴史に実在した人物を、知名度の高さで配列してみると、おそらく「聖德太子」の名がその筆頭を飾ることになるだろう。われわれ日本人にとって聖德太子とはそれほど身近かな存在であるのだが、有名な人物にありがちなこととして、本当の聖德太子の姿というか、その素顔はという点になると、まことに不明なところが多い。早い話が日本の紙幣に印刷されている聖德太子像も、もともと聖德太子として画いた像であつたかどうか、むしろ疑わしいと見るのが専門家の間では常識である。

こうした訳で、一口に聖德太子の研究といっても、大きくは、(一)歴史上に実在した聖德太子の人間像を研究する方向と、(二)太子の死後、主として奈良時代から鎌倉時代にわたる五百年間にわたって発展した聖德太子信仰の実体を研究する方向、の二つの道に大別される。ところが田中氏の『聖德太子信仰の成立』は、この二つの道の接点

を求めようとしているところに最大の特徴がある。そもそも飛鳥時代の人物であつた聖德太子の実像は、奈良時代に記された『日本書紀』以下の史書などに登場するのが最古の手がかりである。つまり一世紀後の記録によつてしか実体が把握できないというハンデのほか、それら最古の手がかりが、すでに太子信仰の色彩を濃厚に宿している。こうしたわけで、聖德太子の研究は、その出発点から不思議な謎の霧につつまれている。そこで田中氏は、まず日本書紀をはじめとするおびただしい「太子伝」を整理し、ついで太子信仰が時代を追って推移していく実体をとらえ、最後に、太子信仰が発生する前後の歴史的情况から、一種超越的な人物としての太子像を演出した仕掛人は誰かという最終の「的」を座標にすえている。

聖德太子は推古朝の皇太子として、内政・外政の両面にわたる政治面での実績を残し、また仏教を主体とする先進文化を移入した文化政策の立役者でもあつた。したがって、この研究は広く古代史の研究そのものとも深くかかわりをもつ点でも、興味

深い話題を投げかけている。『史学雑誌』の「八三年度の回顧と展望」には、この年度における「最も注目される」古代史研究の著作、三書の中の一つとして本書を取り上げ、その成果を「高く評価」している。

格調高いユニークな研究書として、また初心者への親切な配慮をめぐらした入門書として、幅広い読者の要望を満す好著であると思う。

小川光暘（大学文学部教授）

深田三徳著

『法実証主義と功利主義』

ベンサムとその周辺』

（木鐸社 二九五頁 二、三〇〇円）
B6版

ベンサムは近代思想史上最も著名な思想家の一人であるが、同時に「読まれざるベンサム」（ハート）といわれるようにしばしば議論されるわりには実際に読まれることの少ない思想家でもある。彼が残したぼう大な著作（現在刊行中の著作集が完成すれば数十巻に達するといわれている）の森に分け入ってその思想を再構成する作業は、最近になってようやくはじまったばかりであるともいえる。深田三徳教授の新著は、

このような世界的傾向の法学の面でのあらわれのひとつである。

現在なぜベンサムが問題であるのかについて、の著者自身の考えは、本書の序章（現代法理論におけるベンサムの伝統）で明らかにされている。従来著者は「分析法」とよばれるイギリス法理学傾向の解明に一貫した関心をそそいできた。ところでイギリス法理学を二〇〇年にわたって支配してきた二つの中心的思想は「法実証主義」と「功利主義」にはかならず、そのいずれもがベンサムの哲学に端を発しているのである。この二つの思想は近年新たな関心をよびおこしており、肯定的に継承することを意図するにせよ（ハート）、否定的に克服することを意図するにせよ（ドウオーキン）、自国のベンサムの伝統を再検討することが不可欠の理論的課題となっている。こうした現状をふまえてそれでは「英米法理学のベンサムの伝統である法実証主義と功利主義とはいかなるものであるか。それはどのようにして誕生し、いかなる特徴や意義をもつものであったか。それはまたどのようにして継承され、なぜ近年にな

って批判の対象にされてきているのか」（序章一四頁）といった問題を解明しようとするのが本書のモチーフである。

このような関心に沿って本書は三つの部分からなっている。第一章（ベンサムの一八世紀人権文書批判）では、ベンサムの自然法批判を通じて彼の人権論、自然法と功利主義との関係等が考察される。本書の中心をなす第二章および第三章（ベンサムの法理論）では、『法一般論』にそくしてベンサム法理論の基本的構造が明らかにされる。そして第四章（学問としての法理学の成立と展開）では、ベンサム理論のその後の展開が跡づけられている。

本書全体を通じて明快な問題意識が豊富な資料によって裏づけられていることが印象的である。純学説史的体裁をとるためややとつきにくいくらいはあるが、扱われている問題がひとり法学者だけの問題にとどまらないことはいうまでもない。本書での個々の論点がさらに深められ、いっそう抱括的なベンサム像に結実することを希望して紹介の筆をおく。

富沢 克（大学法学部助教授）

石黒昭博ほか著

『現代言語学序説』

(山口書店 三、〇〇〇円) A5版
三二〇頁

本書は十一章からなる文学を専攻する大学生を対象とする言語学入門書である。

第一章「言語と言語学」では、言語についての確認事項、言語学分野が主として述べられている。

第二章「音韻論」では、調音音声学にはじまり、構造主義音素論から生成音韻論に基づく弁別素性、音韻規則が紹介されている。

第三章「形態論」では、形態素の種類、共時的立場からの逆成、混成、短縮、頭字法などの語形成、通時的形態論が扱われている。

第四章「統語論」では、生成変形文法が解説され、その文法に基づく英語と日本語の受動文の比較が試みられている。また、学校文法と構造言語学理論も解説されている。

第五章「意味論」では、成分分析から投射規則、格文法、前提と含意、生成意味

論、解釈意味論、統御、暗喩に至る説明がなされている。

第六章「世界の言語」では、大母音推移、言語の系統的分類などの比較言語学、鏡像関係を含む言語の普遍性が紹介されている。

第七章「語用論」では、(i)発語行為(何かを言う)(ii)発語内行為(何かをする)(iii)発語媒介行為(iv)または(v)が聴手に及ぼす影響から成る発語行為、協調の原理、会話の原則および発語の分析が扱われている。

第八章「談話論」では、文と文の有機的なつながりの形成と原理が、旧情報と新情報、連結性、首尾一貫性などによって説明されている。

第九章「社会言語学」では、言語と社会の相関関係が自由変異とか言語使用域によって述べられ、標準英語の多様性、ピジン、クリオールを紹介が行なわれている。

第十章「心理言語学」では、動物の言語とは違った人間の言語を子供がどのような段階を経て習得していくかが、生成変形文法理論の立場から解説されている。

第十一章「言語と外国語教育」では、科学文法、構造言語学、変形文法、体系文法、ノーションナル シラバスなどの外国語教育に対する影響が述べられ、外国語教育の発展のために、独立した教育言語学の必要性が強調されている。

以上簡単に各章の紹介をしてきたが、全体として非常にわかり易い文章で書かれている。また、音韻論、統語論、語用論、談話論などで、できる限り英語と日本語の比較が行なわれているのも本書を親しみ易く説得力のあるものにしてしている。言語を愛し、人間についてもっと知って欲しい、という著者一人一人の気持が読者に伝わってくるすぐれた言語学入門書である。

小田幸信(女子大学教授)

小野修著

『オーウェル現象の社会学』
——国家と個人——

(世界思想社 B6版)
一九七頁 一、五〇〇円

一
たしかに今年はジョージ・オーウェルの最後の有名な小説「一九八四年」の題名の

年である。今日のテクノロジの発達と政治の様態についてオーウェルは三十六年前、すでに作家として十二分に批判的なイメージをもっていた。

さて、小野氏の本書は、このオーウェルと共に目前に迫っている世紀の悲劇的な新ファシズムについて警笛を鳴らす。

著者は二年前にも「政治における理性と情念」(世界思想社・一九八二年)を出版してその政治思想を展開された。

今回の著書ではさらに突込んで現代国際政治のリヴァイアサンをある種のユーモアもって読者に明示しようとしてされている。いかなる体制であれ、高度の管理システムはことさらに国家と個人の思想と生活に具現される。

この点で私は著者の「北朝鮮訪問記」(II章)、および民主カンボジア(III章)、北アイルランド(V章)からの現地報告の手記から生きた政治学を教えられた。その中には、くだんのオーウェル氏未亡人・ソニアさんとのパリでの出会いまで記されている(一九一頁)。

二

本書の構成は六つの章と付録より成る。

そのうち四つの章(I・III・IV・V)は既に著述されていたものに新しく手を加え、新しい二つの章(II・VI)はオーウェルの時代批評を北朝鮮の実情とその普遍化、つまり政治学的展開としての章に自由でしかもシステムティックにまとめている。

現代の人々は、今やほとんど過去のファシズム的な国家や共産主義の旗のもとに革命的につくり上げたという全体主義の「恐ろしく醜悪な状況とその思想的提示」には耳を貸さない。しかしあらゆる人間組織の中に秘められたこのような専制主義(政治テクノロジ)と忍耐強く、そして自由と良心をもって対峙してゆくためには、その本質を見抜く者であると同時に、その動態的政治社会に「見者として参加する」ことしかない。これが個人の内面にある理性と情念を通して批判的に国際社会の進展を映し出すニュージャーナリズムとなるならば、世界市民に奉仕することになる。

その意味で現代をリードする識者たちは良心のジャーナリストたるべきである。本

書はまずその役割を果たしている。

武 邦保(女子大学教授)

岡本博公著

『現代鉄鋼企業の類型分析』

(ミネルヴァ書房 A5判
三五〇頁 三、四〇〇円)

近年の鉄鋼・鉄鋼関連業界では、一部の高炉や設備の休稼働、形状記憶合金やメッキ・塗装鋼板など新素材、新製品の開発、連鑄など省エネ設備の導入、FA、FMS等の自動化の展開、LANやVANなど高度情報通信網への取組みなどが実施されている。

本書は、このような諸現象も、実は鉄鋼一貫巨大企業の競争と協調からくるものであることを本文の分析を通じて明示してくれる。

著者は、事業所↓企業↓産業(企業グループ↓産業コンツェルン)という三重の分析手続を経ることによって、資本循環たる生産・販売・購買の三過程を各々のレベルで分析し、各レベルでの類型化を行っている。そこでは単純・統合事業所と、単純・統合・多産業統合企業という五つの構造類

型を基準に、鉄鋼一貫巨大企業と、普通鋼製鋼圧延・特殊鋼専業・単純圧延企業の非巨大企業の分析が行われている。

本書全体によって、鉄鋼巨大企業が大量生産・大量流通を実現・統合する唯一、独自の構造であり、同時にそれが巨大企業による非巨大企業の排除過程でもあることを浮彫りにし、さらに企業類型の把握を通じて企業論と産業論の統合をも意図している。

岡本氏が指導教授であった故堀江英一氏の分析方法に倣いながら展開したのは鉄鋼企業論・産業論であったが、しかし繊維産業や自動車産業との対比をも念頭におきながら分析を加えている。岡本氏は鉄鋼産業の文献、資料、統計の引用に留めず、経営史や産業組織論などの文献の渉猟を行い、それら新しい成果を自己の論理展開のバネとして利用している。さらに工場見学や聞き取りなどの実態調査から捕捉し、現実感覚に裏打ちされた分析、展開を行っている。

氏は巨大企業の共通の企業構造によって現代の独占体制の競争と協調が規定されているとの考え方に立っているため、本書で

は一貫製鉄企業の同一性の印象が濃く出ている。

しかし本書の課題外ではあるが、鉄鋼巨大企業の経営戦略の違いや経営多角化の詳細な展開、旧財閥系や銀行系の独占グループとの関連、欧米先進諸国の鉄鋼寡占企業との比較など今後の研究の一層の発展が期待される。

本書は著者の分析の明晰さと瑞瑞しい意気込みが伝わってくる良書であり、斯界の研究水準を一段と上昇させたと思われる。

太田進一（大学商学部助教授）

I・ニュートン著

島尾永康訳

『光学』

（岩波書店）
四〇六頁 A6版
六〇〇円

ニュートンの死後、現在に至るまで、ニュートンの生涯と著作への関心と研究は衰えるところがない。しかし、この数十年來のニュートン研究の質的な多様さと量的な豊富さは類をみない。その一端は、既に本誌で、訳者の著書『物質理論の探求』の紹介の際に記したので、ここでは繰返さな

い。

ニュートンの主著の『プリンキピア』と『光学』は、出版以来、各国語に翻訳されてきた。邦訳も、『光学』については、戦前の岩波文庫版の他に、最近、堀・田中訳と田中訳の二種類の訳書が、相次いで出版されている。物理学者と物理学史家によるこの邦訳には、それなりの特色があるが、最近のニュートン研究の中心の一つである物質理論についての研究成果を殆ど踏まえていないという点に不満があった。島尾教授による新しい岩波文庫版は、この不満をほぼ全面的に解消してくれる。この訳書は、訳文の流麗さや訳註の正確さという点だけでも、従来の訳書をはるかに越えており、加えてこれまでの新旧の訳書―古書も含めて―が極めて高価であったのに対して、廉価であることも望ましい点の一つである。解説も丁寧で分り易い。

最近の研究成果を踏まえたこの訳書の色を、いくつか具体的に挙げてみよう。まず、殆どこのこれまでの内外の現代語訳が、ニュートンの死後まもなく出版された英語第四版を底本となされてきたのに対し

て、訳者はニュートンの存命中の最終版である第三版を底本として採用し、諸版をも比較検討しながら、第四版にみられる、誤植、脱落、数値の誤り、図版の文字の不一致、等の訂正や不適切な図の作り直し、等の、これまで忘れられてきた基本的なテクニスト・クリティックという作業を行ない、面目を一新している点である。次は、科学史の成果を踏まえた訳出上の工夫がなされている点である。ニュートンは、化学・錬金術上の独創的な研究をした訳ではないが、この分野への関心も造詣も深かった。このことは、『光学』に少なからず反映している。この方面の研究者である訳者自身の造詣の深さは、その日本語に対する感覚の良さと相俟って、従来の訳書にはみられない見事な訳語と補註の出現を可能にしている。第三に、原著の各篇の末尾にあった図版を本文中の該当個所に入れたほか、原著にはない図版を適当な個所に入れ、視覚的にも、内容の理解という点からも、読者の便宜をはかっている点である。その他にも、いくつかの特色があるがこのくらいに止めておく。

最後に、訳者には、『物質理論の探求』と『ニュートン』（共に岩波新書）という著書があり、この訳書といわば相補的な関係にある。一読を是非お勧めする。

松尾幸幸（大学工学部助教授）

小川光晴

『寝所と寝具の文化史』

（雄山閣出版 A5版）
一九二頁 二、五〇〇円

人間は一生のうちほぼ半分は寝て暮らすわけであり、しかも睡眠は人間が十分な健康を保ってゆく上にも重要な問題であることは改めていうまでもない。しかし、人間の活動や行為は、これまたいうまでもなく、起きて立ち働いている時に行なわれるものである。過去における人間の行為の集積を研究の対象とする歴史学は、従って、人間が起きて活動してきた昼間の諸行為にその関心が集中することはけだしやむをえない。その結果、遠い過去から現在まで日本人がどのようにして寝てきたかなどという問題は、今までの歴史学が等閑視してきたテーマであった。本書はこの問題に就いて本格的にとりくんだものである。

畳の上に布団を敷いてねる——それが日本人の古くからの生活様式であったように思いこんでいる人は意外に多い。しかし、布団の出現はようやく近世に入ってからであり、しかもそれが一般家庭にまで入りこんで、日本人の一般的な生活様式になりえたのは、じつに明治以後のことである。寝具としての布団をあたりまえのこととして受けとっている大部分の読者にとっては、いつどのようにして布団が出現してきたかを解明してゆく本書の第四章にもっとも興味をひかれるにちがいない。布団は蒲団とも書くが、蒲団はほんらい坐禅にもちいられる坐具であり、寝具としてのフ톤の出現は、木綿の栽培の普及とその生産増加とに深く関係している。そして桃山時代末から江戸時代の初めにかけてようやくフ톤は出現するが、フ톤とはまず敷布団であり、それは元禄期の遊廓で発達をみる。そして夜着といわれていた上掛け夜具が敷布団と同じ長方形に作られてこれもフ톤と呼ぶようになる時期については、著者は元禄期に京大坂に於いてとしつつも、なお決めた問題として結論を今後に残してい

る。

全四章から成る本書は、じつはフツンの出現までの寝所や寝具のあり方がどうであったかの問題に、多くの筆を費やしている。そこには種々興味深い叙述があるが、中でも、トコともユカともよむ「床」、そしてその「床の間」の問題に著者の関心が寄せられている。そしてそのことは、寝所・寝具の問題がそのまま家屋建築の展開の問題であり、生活史の中心的テーマであることを読者に理解させるであろう。

笠井昌昭（大学文学部教授）

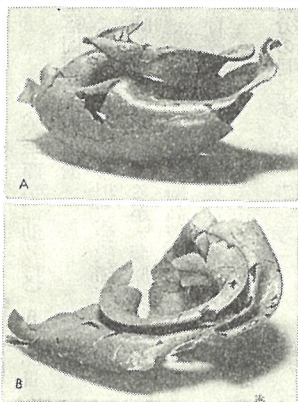
Sue-Lin
Liu
pas delany



同志社校地出土の埋蔵文化財 (6)

鈴木 重治

スエキヨオヘンオオガメ 須恵器窯変大甕



同志社田辺校地内「mamshigakyo」出土（奈良時代）上・口径四三・五cm、下・口径四三cm
同志社田辺校地にある遺跡のうち、一九七六年の分布調査によって確認された遺跡は多い。その中の一つが、「mamshigakyo」と呼ばれた遺跡である。一九八一年の発掘調査によって、奈良時代初頭の大量の須恵器が発見されている。

ここに示す二点の須恵器窯変大甕は、「mamshigakyo」の床面から、杯、鉢などとともに散在して検出されたものであり、

須恵器の編年の観察から八世紀初頭の年代が与えられている。

いちじるしく変形している大甕の当初の形態は、体部の上位に最大の径がある丸底の甕で、外側に反りながら立ちあがる長目の頸と、口縁の端部が屈曲する点に特徴がある。また、頸部には四本単位の櫛状施文具による波状文を、二段にめぐらしていたことが残存部からうかがうことができる。

内面の青海波、外面の格子状叩き痕は、部分的にナデ消されていて、口縁に残るナデの痕跡とともに器面の調整方法を示している。

変形の要因とその時期については、口径が四〇cm以上もある大甕でありながら、器壁の厚さが体部下半よりも、口縁や肩などの上部が厚いことからくる重量によって、焼成中にひずみを生み、胎土の弱さが加わって押しつぶされたものと考えられる。

なお、伴出した大量の杯を含めて、製品の供給先については、同志社校地の西側にある奈良時代の普賢寺が挙げられる。考古学的に、南山城出土の奈良時代初頭の基準資料として評価される。

（同志社大学校地学術調査委員会調査主任）